

竹友藻風 ～ 人と業績 ～

藤 原 弘一郎

早いもので小生が『学匠詩人竹友藻風評傳』と題して竹友^{そうふう}藻風の伝記と業績を私家版として纏めてから 10 年が経ちました。当該私家版を藻風の晩年の教え子で関西学院大学名誉教授であられた故笹山 隆先生に謹呈したところ、笹山先生が学院の学院史編纂室へ持参され、そこで保管されることになったようです。今般はからずも学院史編纂室より竹友藻風に就いて何か書くようにとのお話がありましたので、藻風の生涯、そして関西学院との関係に就いて述べてみたいと思います。



竹友藻風

* * * * *



笹山 隆 (教え子)

竹友藻風（本名：^{とら お} 梶 雄、明治 24 年 9 月 24 日～昭和 29 年 10 月 7 日）といっても今の若い人達はほとんど知らないと思いますが、少しでも戦前の我が国の英文学研究や詩に興味を持たれる人には **big name** として良く知られた名前でありました。藻風の生涯を通してみる時、藻風と関西学院との関係は特別に深いものがあります。即ち、藻風と学院との関係は明治 39 年 4 月から同 42 年 8 月まで関西学院普通学部に進んだ母校の時代、昭和 9 年 4 月より同 23 年 9 月までの関西学院大学英文科の教授時代と昭和 27 年から昭和 29 年逝去直前までの関西学院大学大学院講師時代と前後通じて 20 年に及んでいます。

先ず普通学部時代ですが、時代は日露戦争直後で、当時の学院は 4 年制のハイスクールであったので、卒業生の官立の旧制高校への進学指定校とはなっておらず、進学をさまたげたので 5 年制に変更すべく準備中の過渡期でありました。藻風は学内誌に毎号詩文を載せ早くも麒麟児の片鱗を示していました。国漢学の野村直彦先生は竹友の作文には百点を与えても尚足らず、と評したそうです。当時の教師中村賢二郎氏は藻風の学内誌への寄稿に就き「日本文学的詩文を皮切りとし、彼が学院の英語力を吸収するにつれて英詩訳文となって来た。竹友君が英文学に入ったのは、当時高等部に教鞭をとっていたミス・ガーナー女史に負うところが多いと思う。竹友君は 中学部 では英会話を教わったに過ぎないが、女史の豊かな英詩とその人格に触れたことはまちがいない」と述べています。藻風は進学のため明治 42 年 9 月の普通学部 5 年生の 2 学期から大阪の桃山中学校（進学指定校）へ編入学し、在学 7 ヶ月で同校を卒業（同校では後にアメリカ文学者となった高垣松雄と同級であった）、その後同志社神学校へ進学、そこで明治 43 年の春、同校へ出講で来ていた訳詩集『海潮音』で有名な当時京都帝国大学で英語学・英文学の教授をしていた上田敏と運命的な出会いをして個人的に親

明治 42 年頃の関西学院教員



川島 保 松本益吉 柴田享一
W. K. マシューズ 芦田慶治 村上博輔 M. V. ガーナー
三宅光華 長谷基一 吉岡美国 S. H. ウェンライト M. ウェンライト

炙、敏の家庭へも親しく出入りし、敏から次々と海外文学の書物を借り当時の新しい文学に対し目を開かされてゆくことになります。

藻風は一日でも早く上田 敏について学びたい一心で、その翌年（明治 44 年）9 月京都帝国大学英文科の選科へ入学しています。藻風は「大学三年間はもっぱら上田 敏先生の手塩にかかって勉強した」と言っていますが、大学の上田 敏の研究室へ自由に出入りしてそこにあった蔵書を自由に閲覧することを許され、英・佛・白・典・伊・露等の作家・詩人の著作を借りて読むと同時に、引き続いて敏の家庭にも親しく出入りしていたので、学問・人物両面に互って藻風が敏に感化された影響は測り知れないほど大きなものがありました。藻風の専攻は英文学でしたが、上田 敏の仏文学愛好の学風の影響を受けてフランスの象徴派、高踏派の詩人の詩に親しみ、それらの仏詩人の訳詩を発表し、またサマンの短編小説『イアリス』、モリス・ド・ゲランの散文詩的短篇『サントオル』、我が国初となるアンドレ・ジッドの『狭き門』の部分訳、アナトール・フランスの『シルヴェストル・ボナールの罪』第一部「丸太」の翻訳など主として仏文学の詩文作品を文芸誌に翻訳発表、大正 10 年 6 月に『ヴェルレーヌ選集』、同 13 年 6 月には翻訳集『近代仏蘭西短篇小集 丸太』を上梓しています。

藻風は本職である英語の教師、英文学者として多忙となる昭和に入る前、少なくとも大正の末年迄は仏文学に対し、英文学にも劣らない情熱を持っていたものと思われます。藻風は英文学者としてあまりにも有名であったため英文学以外の仏文学やその他の国の文学関係、『希臘詞花抄』等の訳業は今日埋没していった感がありますが、再評価されてしかるべきかと思っています。藻風は若い頃より自作の詩を書いていましたが、文藝誌『昂(あき)』明治 45 年 2 月号で詩壇に登場し、その後『昂』に掲載された詩 11 篇他 1 篇を纏めて大学 2 年在学中の大正 2 年 7 月に上田 敏の序文を得て処女詩集『祈祷』を上梓し、卒業後の大正 3 年 12 月に第二詩集『浮彫』を刊行しています。藻風の詩はヘレニズムとピューリタリズムの混交した典雅な詩風で、矢野峰人は「その専攻は英文学であったにもかかはらず、藻風の自作詩は殆ど英詩の感化を受けず、むしろ近代仏蘭西詩の方に影響され、サマン、レニエに見るが如き端麗と巧緻があった」と評しています。大正 3 年 7 月藻風は京都帝国大学英文学科(選科)を卒業、翌年の大正 4 年 8 月に米国へ向け留学の途に就きましたが、これが上田 敏との最後の別れとなりました。敏は翌年大正 5 年 7 月に享年 43 歳の若さで急逝、米国留学中であつた藻風は 8 月に New York は Brooklyn の客舎で敏の訃報に接しました。この時藻風は師の上田 敏が果たせなかったダンテ『神曲』の翻訳を完成させようと固く心に誓い、その後殆ど 20 年間の準備・研究、何度かの試訳の期間を経て第二次大戦の間に韻文訳を完成させ、これは戦後昭和 23 年から 25 年にかけて創元社から刊行されました。尚、藻風は大正 9 年に刊行された敏の遺稿集となった『牧羊神』の跋文を書いています。

* * * * *

藻風の米国留学は 4 年 5 ヶ月間ですが、この間イエール大学、次いでコロンビア大学大学院に学び、大正 8 年（1919）コロンビア大学から M.A. の学位を受けています。同大学では当時米国留学中であつた厨川白村（第三高等学校教授兼京都帝国大学英文科講師）の紹介で John Erskine 教授に師事、大正 7 年（1918）に同教授の序文を得て鷗外、荷風、藤村の短篇小説七篇を英訳した本 *Paulownia* を New York の Duffield and Company から出版しています。コロンビア大学大学院在学中の藻風の様子に就いてはアースキン教授の回顧録 *My Life as a Teacher*（1948 刊）の中で優秀な生徒だった藻風の思い出が記されています。

藻風は大正 9 年 1 月末帰朝、同年 4 月より慶應義塾大学文学部の教授として着任しています。藻風が慶應義塾大学で教鞭をとったのは大正 9 年と同 10 年の 2 年間で極めて短期間でありました。藻風は大正 11 年春に慶應義塾大学を辞し、同年 4 月から東京高等師範学校から招聘され、英語科の教授として着任、東京高師在任期間は 12 年間の長きに互っています。東京高師時代は藻風の生涯に於いても最も脂の乗った時期であり、教師、英文学者として、詩人、訳詩家として、あるいは文芸誌（第二次）『明星』の



H. F. Woodsworth

同人として、更には中西悟堂と一緒に日本野鳥の会創立と同会の会誌『野鳥』創刊の産婆役を勤める等、多彩な活動をした時期でありました。この間に刊行された著書だけでも 24 冊に上っています。

* * * * *

関西学院は昭和 7 年 3 月に大学令による大学設置の認可を得て大学に昇格し、同年 4 月に大学予科を開設し、同 9 年 4 月から法文学部を開設しましたが、この中には英文科があり、初代英文科の主任教授（学科長）として東京高等師範学校教授だった藻風が招聘されました。高等学部から分離された文学部の初代部長であった Harold F. Woodsworth が新たに開設する大学の英文科の専任教授につき東京帝国大学英文学科教授の齋藤 勇博士に推薦を求め、齋藤博士が藻風を推したのでありました。

藻風は学院の研究室の壁面の書架にぎっしり自己の蔵書を収めて学生の利用に供し、また、英文科の学生の研究発表の場として関西学院大学英文学会の機関紙「Aries (アリス)」を創刊しています。大著『英文學史 670-1660』や『ドライデン』、『叙情詩論』等はこの時期に執筆され上梓されています。昭和 13 年 3 月に刊行された藻風の最後の刊行詩集（第八詩集、非売品）となる『石庭』は、新設の関西学院大学英文科の第二回卒業生となった中川龍一他五名が卒業に際し、親しく教を受けた藻風に対し感謝の気持ちを込めて捧げたもので、藻風の関西転任以来の自作詩九篇を纏めて刊行したものです。装幀は、関西学院の後輩で、法文学部の講師で和紙研究家・装幀家でもあった壽岳文章が担当、和紙（高野紙）に印刷された純和風の詩集（限定 200 部）であります。

戦後になって、藻風は東京高師教授時代以来の旧知の英語学者で、当時東京文理科大学教授であった大塚高信を関西学院大学教授として招聘しました。大塚教授は昭和 21 年 7 月より着任、ここに藻風、藻風の関西学院の後輩志賀 勝、大塚高信、壽岳文章と看板教授 4 人の揃い踏みとなり、人も羨む関西学院大学英文科の黄金時代が出現したのであります。しかしこの四人体制は長くは続かず、昭和 23 年秋に藻風が新設の大阪大学法文学部英文学科の初代教授として転出し、その後、昭和 27 年 3 月に壽岳文章、



壽岳文章



大塚高信

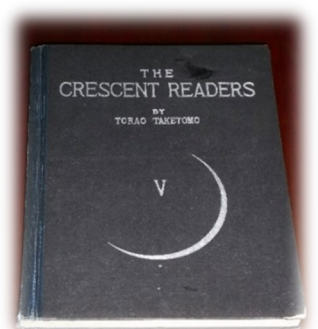


志賀 勝



杉山洋子（教え子）

翌 28 年 3 月に大塚高信の両教授が相次いで新設の甲南大学へ移ったので、関西学院大学の学部と大学院の講義は身体の弱い志賀 勝教授一人が残って双肩に担い、孤軍奮闘の状態となりました。このような状況下、関西学院は阪大の藻風に学院の大学院の講師として出講を懇請、当時藻風は昭和 26 年の夏ごろから眼底出血を起こしたことにより視力が衰えていましたが、出講の要請を受け入れ昭和 27 年 8 月頃から病床に就く直前の昭和 29 年 2 月初めまで志賀教授を助けて関学大学院への出講を続けました。ところが、病状は悪化の一途を辿りました。この関学大学院での藻風の最後の授業の様子は、当時の学生で、学院への送迎時に杖となって藻風を助けた杉山洋子関学名誉教授により『関西学院通信クレセント』の特集記事「座談会 竹友藻風—その人と学問を語る—」の中で語られています。一方、視力を失って以後の藻風の大阪大学での講義の様子は、当時学生として講義を受けた笹山 隆関学名誉教授が『英語青年』の藻風追悼号で記しています。藻風は昭和 29 年 10 月 7 日に享年 63 歳で亡くなりました。志賀 勝教授も藻風の後を追うかの如く昭和 30 年 8 月に亡くなっています。藻風没後、昭和 36 年に藻風訳ダンテ『新生』が、昭和 57 年に『竹友藻風選集』（全二巻）が刊行されましたが、これは大塚高信教授がそれぞれ出版元に斡旋の労をとって実現したものであります。藻風には関西学院の中学校用に編んだ英語の教科書 *The Crescent Readers*（全 5 冊、小生の管見では、刊



壽岳文章 人と仕事 一向日庵と和紙の旅—

10 月 24 日まで、向日市文化資料館にて開催中。（10：00～18：00、入館無料、18 日休館）

行が確認されているのは3冊のみ) があります。各学年に合わせて Book I から Book V 迄あり、黒色の表紙に関学の徽章弦月を象った装幀となっていました。

* * * * *

英文学の中に自然文学の伝統を認めることが出来ます。『釣魚大全』の I. Walton、『セルボーンの博物誌』の G. White、『遙かな国・遠い昔』の W. H. Hudson、『野外にて』の Richard Jefferies、『ファロドン雑考』の E. Grey、更に Edward Thomas、H. Williamson 等々と続く流れです。藻風は我が国に於けるこれらの自然文学作家の作品の紹介・註釋・訳出でいずれも先駆的な業績を残しており見逃せません。更に戦前の旧帝大で教鞭をとった二人の有名な英国詩人、Ralph Hodgson 及び Edmund Blunden と藻風の関係も注目されます。二人とも自然、特に小鳥・野鳥が好きで、また古書漁りが好きでこの点で藻風と共通の趣味を持っていました。Blunden は藻風の詩才を高く評価して藻風を褒めあげた詩を作って残していますし、藻風は Hodgson から直に聞いた英国の小鳥 Bullfinch にまつわるエピソードを英詩の形にして Hodgson へ捧げ、Hodgson はその藻風の英詩を亡くなるまで大切に保存しており、死後未亡人が亡夫 Hodgson を記念して編んだ追悼詩集 *Tribute to Ralph Hodgson* には当該藻風の作った英詩が収録されています。この二詩人、特に Blunden と藻風との交流に就いては今後の藻風研究テーマの一つとなることと思います。<2 頁上と 4 頁下の写真は筆者提供>

2014 年 2 月、藤原弘一郎さんが執筆された『学匠詩人竹友藻風評傳』のことで笹山隆先生からお電話を頂戴しました。その後、先生は現物を手に来室され、貴重な労作なので、英文科用と学院史編纂室用にコピーを取ってから、大阪大学に届けたいとおっしゃいました。そこで、こちらで 2 冊分のコピーを取って製本しました。製本された 2 冊は、先生のご希望通り、英米文学英語研究室と学院史編纂室で 1 冊ずつ保管しています。【学院史編纂室】

【竹友藻風一家】『関西学院大学法文学部卒業アルバム』1938 年より



昭和八年、関西学院大学に英文科を創設するに当たって、招聘を受けました。夏の一日、主人は軽井沢ホテルで時の文学部長ウッズウォース先生とお会いすることになりました。「ひどい雷雨で、ホテルの庭石に火花を見ながら話がはずみ、僕の心はきまった。先生は実にジェントルマンだよ」と愉快そうに語ってくれました。その夜は東京に初めての防空演習がおこなわれていました。

竹友芳「夫・藻風の思い出 去りし日のこと」『関西学院通信クレセント』17号、1984年12月、46頁

【1935 年頃のキャンパス】



神戸女学院と関西学院大学で私は学生として父の講義を受けた。父の講義を受けることに私は恥ずかしさも不自然さもあまり感じず、また父も持前の性格からそのようなことは一向に平気であった。父は授業中、読み以外はあまり指名しなかったように思う。だから私も指名されたのは二度位だが、その時も顔色一つ変えずに「では次を。和ちゃん」と言った。他の友達に驚いたようで、「和ちゃん」が私のニックネームになった時もあった。また黒板の字が美しいのも評判で、ことに花文字のような D や字の続き方がクラスの話題になっていた。ある日、父にこのことを話すと、笑いながら、黒板の字は腕全体を動かすと美しく書けると身振りで説明してくれた。

高木和子「父・藻風の思い出 遠い日のこと」、同 48～49 頁